調査報告　七

宗祇肖柏宗長三吟
宗祇独吟
能順独吟

一冊

井本農一

本書は、山岸徳平博士旧蔵書で、表紙に標記の三書名を三行に墨書してある。のちに本学に移譲され、現在は「山岸文庫」として本学付属図書館に収蔵されている。

標記の三書は、江戸時代の元禄から宝永ごろぐらいまでの間に書写されたと思われる写本で、縦一七糎横一一・五糎、懐紙のように折った楮紙をまた二つ折りにして、四枚ずつ三綴を綴葉風に綴じたもので、各帖の下端は袋綴風になり、上端は開いて二枚になっている。その第一綴の第一丁、第三綴の末丁（第八丁）を表紙と裏表紙にしたもので、表紙を除いて第一丁オ～第七丁ウまでに「水無瀬三吟」をそのあと三行おいて、次の「宗祇独吟」の前書を記し、次丁（第八丁オ）から第十四丁オで独吟を終り、第十四丁ウは白紙である。第十五丁オは「埋もれての巻」と書いて縦線で消してある。その裏から「能順独吟」（何路）を書きはじめ、第二十三丁オ（裏表紙見返）でこれを終っている。表表紙見返し、裏表紙、第十四丁ウを除いては、すべて記載がある。

宗祇・肖柏・宗長三吟（水無瀬三吟）

本書は、いわゆる水無瀬三吟で、水無瀬三吟については前述したので省略する。巻頭に「長享二年三月廿二日於水無瀬」とあり、巻末に句上がある。本文は通行本と多少の異同があるが、大きな異同はない。

宗祇独吟（何人百韻）

明応八年（一四九九）三月から七月末までの三箇月をかけて宗祇が独吟で賦詠した百韻で、門人に遺誡のための作と伝える「何人

百韻」である。多くの写本があり、東京大学国文学研究室蔵本の奥書に「右此百韻は、宗祇打直〳〵沈思の一座なり。入ほかなる事なきを、門弟にしらせんの用意也。執筆は宗顕也。宗牧注之。」とあり、静嘉堂文庫蔵本の奥書には「右連歌は、宗祇被老耄之間、会席堪忍難叶計之条、自三月七月迄連々沙汰之由、友興方より書状有之。」とある。また江戸時代元禄の板本の奥書には「此百韻先年周桂講尺両三度、此道の相伝此独吟に極由、常々云畢。其聞書近日見出侍、則清書而又深函底に納置者也。／元亀辛未初秋中七　紹知／元禄五年十一月廿八日／如是庵叟桑門西順」とある。宗祇の跋文は長いので省略する。

本書には巻頭に「祇公七十九歳三月より文月迄為末世此百韻被連独吟之由云傳」とあり、奥書はない。

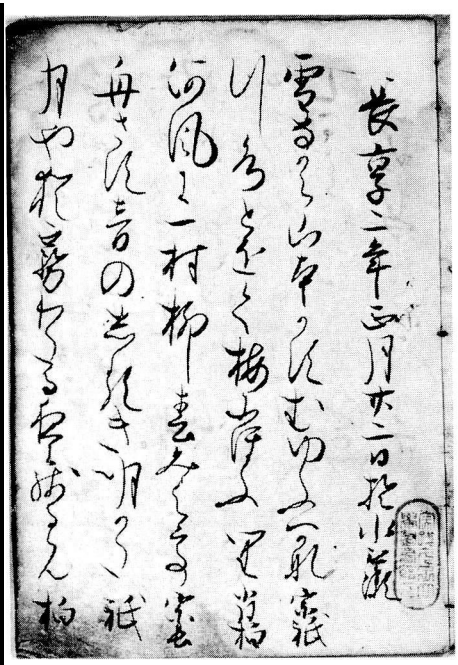
能順独吟（何路百韻）

能順は江戸時代の連歌師で、寛永五年（一六二八）に生まれ、宝永三年（一七〇六）十一月二十八日に、七十九歳で没している。京の北野社家、上大路能舜の子で、のち明暦三年（一六五七）加賀の国、小松の梯神社創建の際招かれて下り、別当職としてこの地方に重んぜられた。芭蕉も『おくのほそ道』行脚の折、加賀藩士で千石を領する生駒万子の紹介で能順に会っている。身分も高かったので当時の連歌界に重きをなしていた。次に本書の跋文を掲げる。

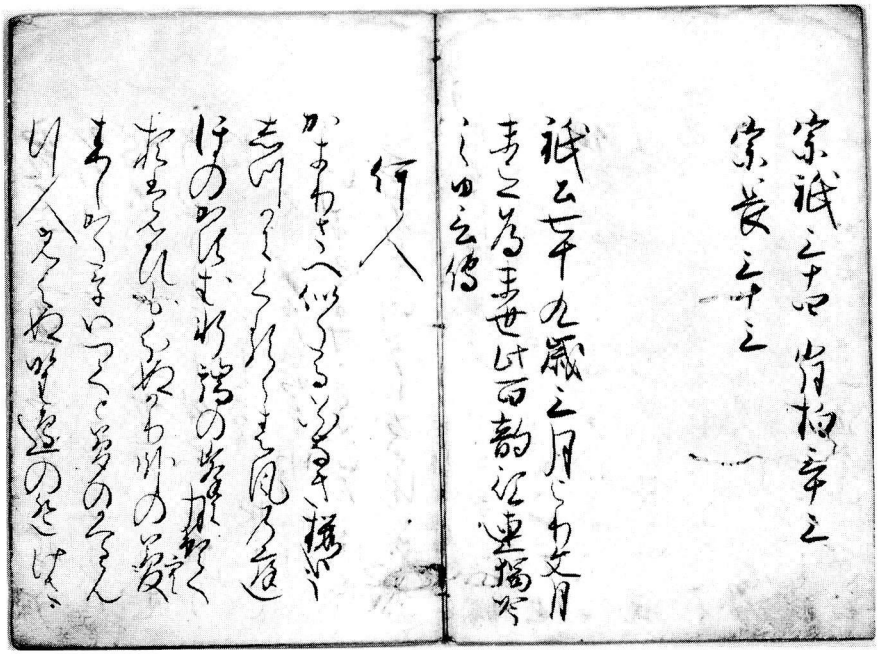
三条西殿、時うしなひ給て、年比籠居給ひける。いかゝおほしけるにか、独吟連哥して見せよとすゝめ給ふ。かく浅ましき句なれハ憚すくなからねと、御直しにも預度く、此道の本意にもやと思ひて、百句綴て御覧に入しに、思ひの外なる御褒美にて、老後のめいほく、悦ひ心にあまりぬ。さるによりて書とゝめ置侍る。

元禄九年十一月十八日　　修竹斎能順六十九歳

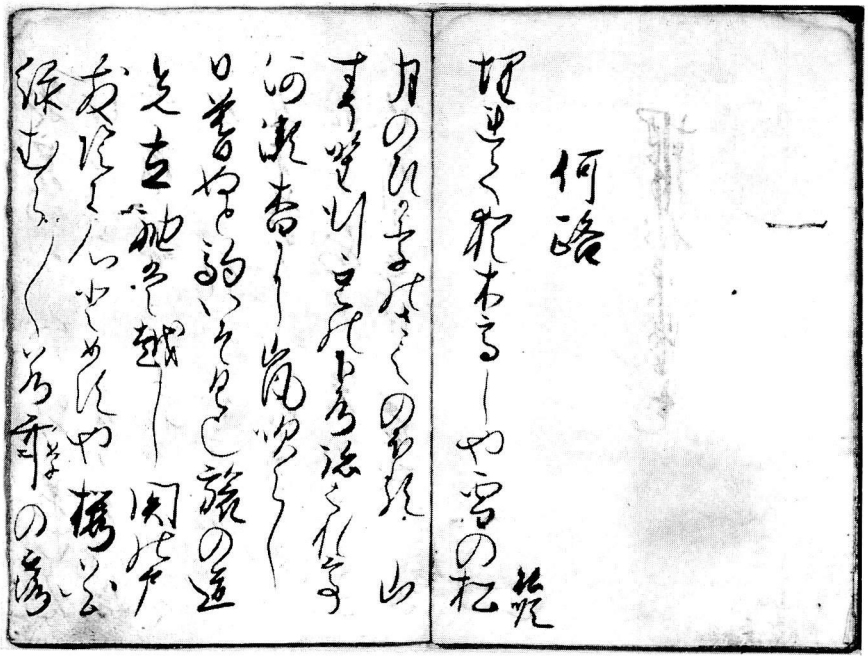
[redacted]



口絵５　「水無瀬三吟」（冊子本）



口絵６　「宗祇独吟」（冊子本）



口絵７　「能順独吟」（冊子本）

[redacted]